

## ライフセーバーの必要性和通年雇用の確保に向けた現状に関する一考察

日本文理大学 学生会員 ○田城 佑衣  
正会員 中西 章敦

## 1.はじめに

四季が明瞭な日本の夏季において、海水浴は人気レジャーのひとつであるが、海水浴場と居住空間の距離の遠さと海岸線の工業用地化等により海水浴客は年々減少の一途をたどっている<sup>1)</sup>。加えて海に対する恐怖心も海離れの原因のひとつとして挙げられており<sup>2)</sup>、水難事故や海洋の危険生物に加え、東日本大震災による津波など、海への恐怖心も起因していると考えられている<sup>3)</sup>。

海難事故への恐怖心を緩和・解消する対策として、ライフセーバーの常駐が挙げられる。2020年は新型コロナウイルスの影響によりライフセーバーが活動した海水浴場の割合は54%であったのに対し、救急件数・応急件数は例年の10~20%となるなど事故の少ない結果となっている<sup>4)</sup>。このことからライフセーバーの存在は海水浴時の恐怖心を取り除き、海離れを解消するうえで重要な役割を担っているといえる。しかし筆者らの調査では現在大分県において、ライフセーバーは職業として収入を得るには困難な状況である<sup>5)</sup>。特に冬季は遊泳目的の利用は少なく、収入を得て生計を立てることは困難である。

本研究はライフセーバーの必要性を明確にし、国内のライフセーバーの現状把握を目的とする。

## 2.調査対象者

調査対象者は、ライフセーバーに関するアンケートを日本ライフセービング協会に所属する認定ライフセーバーに、ライフセーバーの必要性については無作為に選定した一般人を対象とする。

## 3.研究方法

一般の方を対象に海水浴の頻度・イメージとライフセーバーの必要性に関する意識のアンケートを実施した。ライフセーバーを対象に、業務の現状と監視業務以外で展望のあるコンテンツについてアンケートを実施した。

## 4.結果と考察

ライフセーバーの常駐する海水浴場に対する意識について、回答数は148、結果を図-1に示す。海水浴場におけるライフセーバーの存在は安全性という面で非常に必要性が高い。海水浴中に溺れた際でも助けてもらえるというイメージにより海水浴場に安心感を生み出していることが明らかである。海難事故に遭遇した際に頼ることのできる存在が常にいるという危険リスクの回避も可能である。

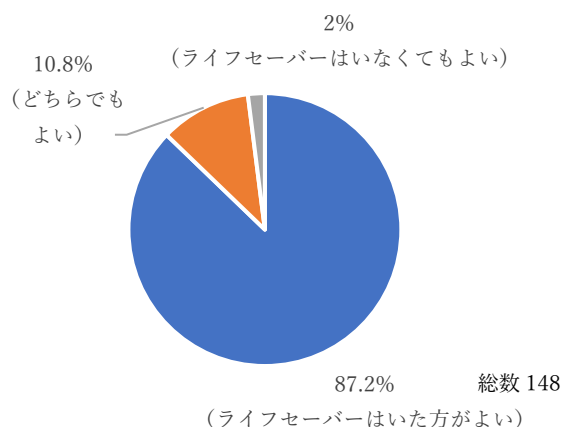


図-1 ライフセーバー常駐海水浴場に対する意識

次にライフセーバーに体するアンケートについて、回答団体数は80、回答者数は208であった。

ライフセーバー活動のみで得られる収入状況を図-2に、監視業務以外で行っているクラブ活動を表-1に示す。

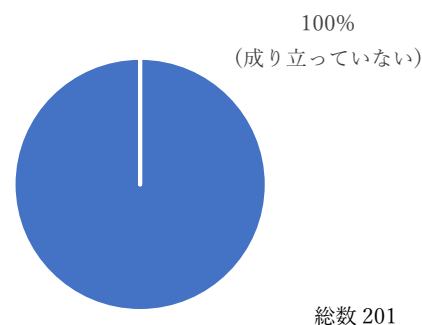


図-2 ライフセーバー活動のみで得られる収入状況

表-1 監視業務以外のクラブ活動

業務内容	出現回数	業務内容	出現回数
ジュニアライフセーバー教室	26	ライフセーバー体験	5
講習会指導員・運営	19	防災活動	4
安全教室	17	安全管理	4
清掃活動	16	マリンスポーツ体験運営・監視	3
大会監視員	14	広報活動	3
イベント活動	14	競技会参加	2
トレーニング	8	プールスタッフ	1

全ての回答で生計が成り立っていないとの回答で、ライフセーバーの収入のみでは生計を立てることが困難であることがわかる。また監視業務以外での活動ではジュニアライフセーバー教育や講習会、安全教室等が頻繁に挙げられた。ヒアリングの結果、これらは参加費が無料であるものやボランティアでの参加がほとんどで、ジュニアライフセーバー教育に関しても会費のみの支払いのため、用具の維持費等により直接的な収入につながることは少なかった。イベントスタッフや大会の監視員に関しても報酬は依頼元によって上下するため、安定した収入を得られるまでには至っていない。清掃活動に関してもクラブ内のメンバーでの活動が主なため、収入を得られる活動ではなかった。

アンケート内のライフセーバーの職業化やライフセーバーそのものに関する自由記述にて、10回以上出現した頻出語一覧を表-2に示す。頻出語全体を通して海とライフセービングに関連する語句が多く、ライフセービングを通して得られた知識やスキルを活用できる活動形態が理想であると考えていることが分かる。

表-2 自由記述頻出語一覧

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
活動	56	考える	20	地域	13
思う	51	海	18	冬場	13
ライフセーバー	49	スポーツ	17	クラブ	12
雇用	33	競技	17	海水浴	12
安全	31	必要	15	教育	12
通年	30	イベント	15	可能	11
ライフセービング	29	行う	15	研究	11
業務	28	公衆	15	体験	11
プール	27	指導	15	利用	11
ビーチ	26	水辺	15	ガード	10
監視	25	学校	13	運営	10
管理	22	大会	13		

同様に自由記述の回答文をもとに、KHcoder<sup>6)</sup>を用いたテキストマイニングにて生成した階層クラスターでは、兼業、新事業、冬季の観光利用、スポーツと防災、通年雇用、行政支援、安全指導と体験、競技としてのライフセーバー、認知度に関する9つの内容に分類された。認知度に関しては、ライフセーバーは海に来る人々の命を守る役割という認識はあるが、海岸の監視業務以外どのような業務を行っているのか普及していないとの内容であった。

## 5. 結論と今後の課題

ライフセーバーは海水浴場を利用するにあたって、安全性という面において必要であると認識されているのにも関わらず、ライフセーバーとしての業務のみでは生計を保つほどの収入を得られていないことが明らかになった。

今後の課題として、ライフセーバーとしての活動で収入を得るため、ライフセービングで得られる知識や経験を活かした内容から通年雇用に向けたコンテンツを生み出すことなどが挙げられる。

## 謝辞

本研究に取り組むにあたり、公益財団法人日本ライフセービング協会風間隆宏様にはアンケートの許可申請並びにアンケート配布に協力していただきました。ここに記して感謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 前河一華，十代田朗，筒見崇：イベントによる海岸の利活用に関する研究—千葉県沿岸市町村を事例として—，公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集，p1137，2015.10
- 2) 田島佳征，畔柳昭雄：「海離れ」記事への書き込みコメントから見た海水浴に対する要因把握，環境情報科学 学術論文集 35，pp247~248，2021
- 3) 国土交通省：2011年海に対する国民意識調査
- 4) 日本ライフセービング協会：JAPAN LIFESAVING ASSOCIATION ANNUAL REPORT，2020
- 5) 田城佑衣，中西章敦：ライフセーバーの通年雇用化に向けた基礎調査，2021.1
- 6) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の警鐘と発展を目指して，ナカニシヤ出版，2014